

〔白氏文集十二感傷〕長恨歌

臨別殷勤重寄詞、詞中有誓兩心知、七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝、

〔本朝世記〕康和五年十二月廿日乙丑、正四位下行木工頭兼丹波守高階朝臣爲章卒、爲章者、入道備中守正四位下爲家第一子、母贈從三位藤原義忠女也、○中六年治十一月八日、於爲加賀守、七年

八月廿八日、親父近江守爲家朝臣、坐凌轢、春日神民事、除名配流、爲章依爲長男、可有緣坐、然而依臨

時之恩、不坐、四男阿波守爲遠、一人停見任、非常斷人主專之義也、嘉保二年十二月、兼木工頭、爲章者

白河法皇寵過○過恐遇誤之人也、于時因幡守藤原隆時、同爲近臣、世語寵臣者、稱此二人而已、卒時卅五

〔源平盛衰記二十六〕祇園女御事

古人ノ申ケルハ、清盛ハ忠盛ガ子ニハ非、白川院ノ御子也、其故ハ、彼帝感神院ヲ信ジ御座テ、常ニ御幸ゾ有ケル、或時祇園ノ西大門ノ大路ニ、小家ノ女ノ怪ガ、水汲桶ヲ戴テ、麻ノ狹衣ノツマヲ舉ツ、韓シニ桶ヲ居置テ、御幸ヲ奉拜、帝御目ニ懸ル御事有ケレバ、還御ノ後、彼女ヲ宮中ニ被召テ、常ニ玉體ニ近ヅキ進セケリ、祇園社ノ選ニ當テ、御所ヲ造テ被居タリ、公卿殿上人、重キ人ニ奉思テ、祇園女御トゾ申ケル、

〔平家物語〕妓王事

そのころ京中に聞えたるしらびやうしのじやうずぎ王、ぎ女とて、おとゞひあり、とちといふしらびやうしがむすめなり、しかるにあねのぎわうを、入道相國○平清盛てうあいし給ひしうへいもとの妓女をも、世の人もてなす事なめならず、母とちにもよき屋つくつてとらせ、毎月に百石百くはんををくられたりければ、家内ふつきして、たのしひ事なめならず、○中略又しらびやうしのじやうず、一人出來たり、加賀の國のものなり、名をばほとけとぞ申ける、年十六とぞきこへ